

[005]ポリモルフィア表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7343134>

出版情報：ポリモルフィア. 5, 2020-03-03. Office for the Promotion of Gender Equality, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



採択研究要旨

2018年度ジェンダー研究に取り組む学生への研究助成プログラム 採択者 16名

日本のフェミニズムにおける メディアを通じた連帯とその変容 —ミニコミとzineの比較分析から—

家入 祐輔

九州大学法学部 4年

1. 問題と目的

90年代以降、日本において主流派のフェミニズムは「日本人中心・ヘテロセクシュアル中心・主婦フェミニズム」の傾向があり、性的マイノリティや在留外国人をはじめとしたマイノリティの女性たちが十分に配慮されてこなかったという批判が、フェミニズム内部で反省的に捉え返されてきた（金井 1997: 172-195）。

そこで、非対称な性質を持つそれぞれの立場（「女性」「男性」「異性愛者」「同性愛者」等）の間で、その立場の固有性に配慮しながらも、いかに性に関わる問題の解決に向けて対等な対話空間、「つながり」を構築できるのかを模索することは、顕在化した「差異」「分断」を架橋していく上で現在直面している課題となっている（荒木 2018）。

本研究では、この課題を共有し、解決への一つの足がかりとするため、ウーマンリブや現在のフェミニズムにおける「つながり」方をメディアコミュニケーションの側面から検討した。

2. 方法

本研究では、運動や活動の主体（当事者）からの働きかけやその意図に、より着目できるよう、フェミニズム的活動に関わる人たちによるミニコミやzineと呼ばれる自主出版物を対象にした。ミニコミ・zineとは、どちらも自主出版物の呼称であるが、特に2000年代以降のインターネットの普及からミニコミに代わりzineという呼称が使われるようになったといわれている（ばるばら・野中 2017: 10）。調査方法は、ミニコミについては東京ウィメンズプラザでの資料調査を行い、73誌のミニコミを分析した。zineに関してはインタビュー調査、関係イベントへの参与調査を行い、6名へのインタビューと32誌のzineを分析した。

3. 結果と考察

ミニコミとzineについて主に「主語」とメディアの「様式/文化」の2点において差異が明らかになった。

ミニコミでは、「^{わたし}女」という表現が主語やその語りにおいてみられ、「わたし」の経験を「女」の経験として引き受けて表現するという様式が確認できた。また、調査した73誌のミニコミのうち個人で作られたミニコミは1誌だけで、団体によって作られたミニコミが多かった。このことから、「わたし」の経験・問題を「女」のものとして女性問題化し、「女性」という立場のもとで団

体の形をとって連帯することが図られていたことが伺えた。しかし、団体という組織化の様式をとることで、女性団体として「方向性」をもって運動へと向かえる一方で、その「方向性」が個人の考えや方向性と噛み合わず、衝突するということもしばしばあった。

これに対してzineでは、「わたし」が主語となることが多く、特定の立場を代表するような語りはみられない傾向にあった。また32誌中25誌が個人によって作られており、ミニコミに見られたような団体を前提とした組織化は行われていないようであった。調査を通して、zineの作り手は、(1)性の問題について「取るに足りない」とさえ思われるものでも表現したり、(2)zineを敢えて作り込み過ぎないようにしたり、(3)「自由さ」をzineの文化に取り組んでいったりすることなどを通して、表現行為自体の敷居を下げることを実践していたことが分かった。そしてその実践を受けて、読み手が「自分でも作れる」と思えることによって、「作り手」＝「書き手」の関係が構築されることが、zineの作り手によって意識されていた。こうして、表現が次の表現を呼び込むことで緩やかにつながりが作られており、特別な技術や参加資格などが必要とされない、個人の「現れ」が十全に確保できるコミュニケーション空間の構築が目指されていた。一方で、この空間が公共圏ないし対抗的公共圏のような批判的討議空間へ接続する可能性については、今後検討していく必要があるだろう。

4. 主要文献

金井淑子, 1997, 「ポストモダン・フェミニズム」
江原由美子ほか編『フェミニズム』新曜社,

172-195.

荒木菜穂, 2018, 「日本の草の根フェミニズムにおける『平場の組織論』と女性間の差異の調整」牟田和恵編『架橋するフェミニズム』松香堂書店, 37-51.

ばるばら・野中モモ, 2017, 『日本のZINEについて知ってることすべて 同人誌、ミニコミ、リトルプレス——自主制作出版史1960～2010年代』誠文堂新光社.

18世紀イギリスにおける男性結社 フリーメイソンの正当性の論理

倉持 遥

九州大学教育学部 4年

1. 問題と目的

本研究の目的は、18世紀ロンドンに創設された秘密結社フリーメイソンが、「寛容」、「平等」といった精神を重要とする一方で、会員は男性に限定し、女性を排除していたのはなぜなのかという問いを追究することである。そのため、18世紀のヨーロッパの思想に大きな影響を及ぼした啓蒙思想や科学に着目しながら、会員を貴族や王立協会(Royal Society)などの男性知識人に限定していた正当性の論理を解明し、その論理の矛盾点を明らかにする。当時のヨーロッパの国際関係や啓蒙思想とフリーメイソンとの関係についてはM.C. ジェイコブス(1984)の研究に詳しい。1750年代までは、女性やユダヤ人のロッジ入会を認めたロッジは存在しなかった。しかし、その後それぞれの国のロッジの特色が現れはじめ

る。ジェイコブス（1984）は女性の入会を退けたロンドンのロッジの正当性の論理を、女性の入会を認めたオランダのハーグのロッジの設立背景に着目しながら論じる。ハーグのロッジでは、ロンドンの『憲章』では認められていないにも関わらず、男女の平等なロッジへの入会が認められ、等しく同胞（fraternity）として扱われていたという点において新しいロッジであった。啓蒙思想の担い手である啓蒙知識人男性は女性の教育可能性を示唆しながらも、「科学」を使い「客観的」な論拠から女性の社会への参入を退けた（M. C. Jacobs 1988）。それと似た構図をフリーメイソンの組織の中で見る事が可能である。本研究では、ロンドンのロッジがどの言葉や表現を使って正当性を表現しようとしているのかを詳細に見ていき、何を以て主張の正当性を証明しようとしたとしているのか明らかにしていく。また、憲章の内容に背く動きをとったオランダのロッジに対して、ロンドンのロッジはどのような態度をとっていたのかにも着目する。

2. 方法

史料としては、メイソンであり王立協会会員でもあったJ.アンダーソンの『フリーメイソン憲章』やG.オリバーが編集する『遺稿集（全5巻）』、『イラストレーション』を用いる。

3. 結果と考察

本研究を通して、史料の中において「伝統（逸話）」、「科学」、「美德」といった言葉がフリーメイソンの正当性の根拠として多く用いられている、ということが明らかになった。ロッジの活動の目的を「人類の進歩のため」としたり、活動の

根拠として逸話やフリーメイソンの伝統の伝承を挙げたりと、彼らが正当性を持って語っている箇所を検討してみると論理として成り立つとはいいがたい。「科学」を根拠に女性のロッジへの入会を否定していた排除の論理も同様である。理神論に基づく18世紀の科学は、「客観性」の中に「科学」の担い手の意図を大きく含ませることを可能にするものであり、根拠としては不十分であるにも関わらず十分な「客観性」が担保されているように見なされている。また、フリーメイソンの正当性の根拠として、「美德」という言葉も史料の中で多く登場するが、これも「伝統」と同様に根拠としては実に不十分なものである。「美德」に関しては、出版物や文献にも登場し、この言葉は根拠を述べる際に一般的に用いられているということが確認できる。しかし、「美德」という言葉は論証なく受容されがちな言葉である一方、感覚的に使用される言葉の一つであり、又時代と共に含まれる意味も若干の異なりを見せる可能性を大きく含んでいる。言葉の使い手の意思を含ませ、自由自在に操ることのできる「科学」「美德」「伝統」という言葉の数々は、根拠として使いやすいというだけではなく、十分に正当性や説得力があるように見える言葉なのである。海外に存在するより詳細な史料の入手やフランスにおける女性だけの「養子ロッジ」の誕生や運営などについての言及は今後の課題としていきたい。

4. 主な参考史料・参考資料

- James Anderson A.M., *The Constitutions of the Free-Masons*, London, 1734, Online Electronic Edition, University of Nebraska - Lincoln, <https://digitalcommons.unl.edu/>

libraryscience,

- G. Oliver, *The Golden Remains of the Early Masonic Writers*, 5 vols.
- William Morgan, *Illustrations of masonry*, 1772, London, (rep. 1887)
- M.C. Jacobs, 'Freemasonry, Women, and the Paradox of the Enlightenment', *Women & History*, 1984, pp. 69-93
- M.C. Jacobs, 'The cultural meaning of the scientific revolution' *Temple University Press*, 1988, pp. 105-135

歯周病原細菌 *P. gingivalis* 感染による 老齢マウスの脳機能の性差について

中西 悠梨香

九州大学歯学部 5年

1. 問題と目的

日本は世界一の長寿国であり、平均寿命は男性81.09歳、女性87.26歳である。しかし、健康寿命は男性72.14歳、女性74.79歳と約10年間を日常生活に制限がある状態で過ごしており、要介護原因の第一位は認知症である。認知症患者は日本で400万人を超え、6割以上を占めるアルツハイマー型認知症の発症率は加齢に伴い増加し、85歳で30%を超える。アルツハイマー型認知症の発症仮説として従来「アミロイド仮説」が唱えられてきたが、この仮説に準じたアミロイドβおよびリン酸化タウ蛋白をターゲットとした治療薬開発は成功していない。近年「慢性炎症仮説」が提唱された。脳内免疫細胞の一種であるミ

クログリアがアミロイドβや末梢炎症などの刺激により活性化されて脳炎症を引き起こし、慢性化した脳炎症が神経細胞の機能障害を起こすという。また、アルツハイマー型認知症の発症と口腔慢性炎症である歯周病に正相関があると報告されている。本学歯学部の研究では歯周病原細菌 *P. gingivalis* の成分が中年マウスにおける認知機能の低下、脳炎症の発生、ならびに神経細胞内アミロイドβの蓄積という認知症様病態を誘発することを報告した。アルツハイマー型認知症は高齢女性の発症率が高いにも関わらず、発症原因と考えられるミクログリア関連炎症の性差に焦点を当てた研究は極めて少ない。そこで、本研究ではアルツハイマー型認知症患者に高齢女性が多い理由とそのメカニズムを探り、*P. gingivalis* の感染に対するミクログリアの反応を検討した。

2. 方法

アルツハイマー型認知症の慢性炎症仮説に沿って①歯周病原細菌 *P. gingivalis* を感染させた老齢オス、メスのマウスの学習・記憶機能の性差を検討し(実験1)、②老齢オス、メスのマウス脳内細胞における反応を検討した(実験2, 3)。

(実験1) *P. gingivalis* 感染による老齢マウスの学習・記憶機能

老齢オス、メスのマウス(15月齢)を用い、明暗ボックスを使用し、本質的に暗室を好むマウスに電気刺激を与え、暗室に入らないことを学習・記憶させた。全てのマウスの学習記憶が定着したことを確認後、老齢オス、メスのマウスに *P. gingivalis* (ATCC33277, 10^8 CFU/匹, 100 μL, 3日に1回、腹腔内投与)を投与し(実験群)、投与しない群(対照群)には同量のPBSを投与し

た。計4群のマウス(各群6匹)に明暗ボックスにて受動的回避試験を行った。

(実験2) *P. gingivalis* 感染による老齢マウスの脳細胞応答

実験1のマウスの大脳皮質切片を用い免疫蛍光染色法にてIba-1, GFAP, Nisslという一次抗体で脳内細胞であるミクログリア、アストロサイト、ニューロンを赤で標識した。次に、二次抗体で抗炎症関連因子Arginase-1を緑で標識した。

(実験3) 単離ミクログリアにおける*P. gingivalis* 刺激による炎症、抗炎症反応

正常な老齢オス、メスのマウスの脳からMagnetic-activated cell sorting (MACS) 法を用いてミクログリアを単離した。単離したミクログリアを培養し、*P. gingivalis*を感染させ(MOI 1:5, 感染時間12h)、ミクログリアにおける炎症関連因子iNOS、抗炎症関連因子Arginase-1、エストロゲン受容体 α (ER- α)の発現量ならびに、エストラジオール(E2)、ER- α 作動薬であるPropyl pyrazole triol (PPT)、ER- β 作動薬である2,3-bis(4-hydroxyphenyl)-propionitrile (DPN)を前処理後、*P. gingivalis*感染によるミクログリアにおける抗炎症関連因子Arginase-1の発現量をqRT-PCRで定量的に分析した。

3. 結果と考察

(実験1) 歯周病原細菌*P. gingivalis*を感染させた老齢オス、メスのマウスにおいて、学習・記憶機能の性差として、*P. gingivalis*感染開始2週間目から老齢メスマウス群の記憶機能の有意な低下が認められた。

(実験2) *P. gingivalis*を感染させたマウスのミクログリアにおいて抗炎症反応が認められた。

(実験3) E2およびPPTを前処理したミクログリアではArginase-1の発現量が有意に増加した。一方、DPNの前処理によるArginase-1の発現量に有意な変化は認められなかった。

以上の結果から、高齢女性では脳内における抗炎症能が低下し、脳炎症が持続することが推測される。それによって神経細胞の機能障害を起こし、認知機能の低下の速さに繋がると考えられる。本研究で着目したE2ならびにER- α は、歯周病関連性のアルツハイマー型認知症発症メカニズムにおいて重要な物質である可能性があり、今後さらに研究を進展させたい。

4. 主要文献

- Wu Z, Ni J, Liu Y, Teeling J, Takayama F, Collicutt A, Paul I, Nakanishi H. (2017) : Cathepsin B plays a critical role in inducing Alzheimer's disease-like phenotypes following chronic systemic exposure to lipopolysaccharide from *Porphyromonas gingivalis* in mice. Behav. Brain Immun., 65:350-361.
- Liu Y, Wu Z, Nakanishi Y, Ni J, Hayashi Y, Takayama F, Zhou Y, Kadawaki T, Nakanishi H. (2017) : Infection of microglia with *Porphyromonas gingivalis* promotes cell migration and an inflammatory response through the gingipain-mediated activation of protease-activated receptor-2 in mice. Sci Rep. 2017; 7: 11759.

1920～30年代中国における 学校衛生教育—女性を中心に—

徐 佳汝

九州大学大学院人間環境学府 修士課程1年

1. 問題と目的

20世紀前半の東アジアにおける衛生の制度化について、飯島渉は、その契機が19世紀末からの感染症、特に、腺ペストの流行対策にあったことを指摘し、政府が積極的に衛生事業に関与するという近代国家的なあり方が中国にも導入されたと論じている。当時の中国において、「衛生救国」や「愛国衛生」などのスローガンに見られるように、「衛生＝文明」という観念は、国家建設と緊密に結びついていた。この観念の下、中国近代の衛生の制度化は、西洋医学や公衆衛生事業の導入による技術移転には留まらない社会制度の根幹に関わる問題であり、身体をめぐる国家と個人の間関係をいかなるものとするか、という問題を中国社会に提起するものであった。そして、「身体の植民地化」（＝医療、衛生事業を媒介とする植民地統治）と「民族の防衛」（＝欧米及び日本の衛生事業への介入に対する対抗）が交錯する中で進展したとしている。すなわち、「帝国医療」という概念がここで指摘されている。[飯島2009：227]

具体的に上海の衛生行政について論じたのは福士由紀（2010）である。福士によれば、当時租界となっていた上海は、人々の移動や商品流通の結節点となったため、様々な衛生問題が発生し、人口が密集した都市の生活環境は各種の伝染病の流行を激化させることとなった。一方、近代西洋医学に基づく新たな学知体系や価値観・観念も同

時期に導入されていた。上海では、早い時期から外国人によって近代的衛生観念に基づいた公衆衛生行政が展開されており、近代公衆衛生制度確立において、中国の都市の中でも代表的な地域と指摘されている [福士2010：9]。以上の研究を踏まえて、本研究は、学校における女子生徒に対する衛生教育内容として何が求められたのか、また児童健康を改善するため、家庭で母親としてのどのような理想像が期待されたのかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

本研究は、中華衛生教育会・上海特別市衛生局によって発行された『衛生季刊』（1924）と『衛生月刊』（1928～1943）を通して、中華衛生教育会・上海特別市衛生局の女子生徒に対する学校衛生教育の構想を分析する。

3. 結果と考察

本研究の結論として、以下の二点がある。まず、当時の学校・学校教員の職能が「子どもの識字率を上げ、リテラシーレベルを向上させる」ような「知的成長」を目指すことから、「子どもの身体・精神健康」に力点を移したことを指摘した。この観念の下に、子どもを産み育てる女子生徒への衛生教育は重要視されるようになった。

次に、家庭を子どもの身体にとって有利で、衛生的に見て合理的な場所に変えようとしたことについて述べ、健康な子どもを産み育てる母親も期待されたことを明らかにした。

このように、本研究では、中華衛生教育会をはじめとする民間団体が、児童に正しい衛生習慣を身につけさせ、新たな衛生思想を普及させたこと

をジェンダーの視点を通して論じた。また、各地の学校の児童に対する健康診断、体格検査、予防接種が衛生当局によって行われると同時に、女性への期待についても分析を行った。学校の機能が、「子どもの識字率を上げ、学習能力を向上させる」ことから児童生徒の健康についての学知や経験の集積地までに拡大していったことの下に、女子生徒に衛生知識を身につけさせ、女性の子どもを産むから大人に育てるまでの役割が重要視されたことが明らかとなった。

今後は、国際衛生会議（1885、1903、1926）等への医学者、行政官らの参加、学校衛生教育に対する言論や活動を通して、西洋医学や衛生知識の受容、衛生事業及び衛生科学の国際化という文脈における上海の学校衛生教育の展開過程を究明したい。特に、男女の児童への衛生教育や母親の関与の実相に迫りたい。

4. 主要文献

- 飯島 渉 2009 『20世紀中国史：近代性の構造』 東京大学出版会
- 福土 由紀 2010 『近代上海と公衆衛生——防疫の都市社会史——』 御茶の水書房
- 李倩倩 2014 「民国時期中華衛生教育会研究（1916～1930）」
- Paul Wakefield 1924 「The School Waits」『衛生季刊』第1巻第1期、1-10頁
- 潘泰馥 1924 「教師对于学校衛生工作应有之認識」『衛生季刊』第1巻第1期、112-113頁
- 張炳瑞 1934 「児童衛生」『衛生月刊』第4巻第2期、72頁
- 上海特別市衛生局 1929 「上海特別市衛生局学校衛生実施概況」『衛生月刊』第2巻第5期、

3-4頁

- 尤濟華 1934 「口腔衛生在児童衛生中之地位」『衛生月刊』第4巻第3期、123-124頁
- 「教育衛生——設計教授法」1924『衛生季刊』第1巻第1期、11-28頁

育児期女性の仕事と育児の両立と 保育所に関する研究 —企業主導型事業所内保育所に着目して—

謝 傑

九州大学地球社会統合科学府 修士課程1年

1. 問題と目的

的場康子と友川礼・桐木陽子・高橋圭らの研究によれば、企業主導型事業所内保育事業は、保育の受け皿としての拡充が期待できる。これに加えて、厚生労働省が発表した「保育所等関連状況取りまとめ(平成29年4月1日)及び「待機児童解消加速化プラン」集計結果を公表」によると、平成29年4月1日の企業主導型事業所内保育事業における保育受け入れ数は20,284人であった。以上のことを踏まえると、企業主導型事業所内保育事業において保育の受け皿の拡充が期待できるということが明らかになった。一方、当時企業主導型事業所内保育所を創設する背景のひとつとして、女性の仕事と育児の両立に対する支援も図られているがその効果についての研究はまだ少ない。そこで、本研究では、企業主導型事業所内保育所に着目し、企業担当者と利用者を対象にインタビュー調査を実施し、その結果をもとに、企業主導型事業所内保育所が、その時間的・空間的特

性から、育児期の女性の仕事と育児の両立にどのように影響するのかについて仮説を設定することを目的とする。

2. 方法

2.1 文献調査

少子高齢化、女性の社会進出、待機児童、保育、女性の仕事と育児の両立などについての専門書や先行研究論文を探す。それに加えて、オープンデータを収集し、データの分析を行う。

2.2 インタビュー調査

企業主導型事業所内保育所の企業担当者、企業主導型事業所内保育所の従業員枠を利用している利用者及び地域枠を利用している利用者をインタビューする。調査対象としたのは、福岡市博多区にあるF社（不動産事業、理美容事業）の企業主導型事業所内保育所である。調査の概要は、下記の通りである。

調査対象：F社保育所 企業担当者1名
利用者2名（Aさん、Bさん）

調査時期：2019年2月

調査項目：企業担当者 開設経緯、設立目的・運営方針、設置・運営体制、利用者にとっての利用上のメリット・デメリット
利用者 利用理由、利用上のメリット、デメリット

3. 結果と考察

本研究は、福岡市博多区にあるF社の企業主導型事業所内保育所を分析事例として企業担当者と

利用者を対象にインタビュー調査を実施した。その結果をもとに、企業主導型事業所内保育所を利用すると、育児を仕事の時間・空間に持ち込むこと、仕事の時間・空間を柔軟に変えることが可能になることで、仕事と育児は統合され両立は促進されるという仮説を設定することができる。

一方、企業主導型事業所内保育所は、近年展開している保育所としては、スペースが狭い、流行性の病気を発症するなどの課題も看過できないだろう。また、今回の調査は従業員枠を利用する利用者と地域枠を利用する利用者を分類した上で調査を行った。今後の課題として、利用者について年齢階級別の調査を行う必要がある。利用者の年齢階級別調査できれば、各世代の女性の仕事と育児の両立状況を詳しく把握することもできる。

4. 主要文献

- [1] 赤堀三郎（1998）「社会システムの分化と統合—『システムと生活世界』再考—」『ソシオロギス』22: 1-15
- [2] 的場康子（2016）「企業主導型保育事業に期待すること」『Life design report=ライフデザインレポート』220: 40-44
- [3] 田邊浩（1999）「社会統合とシステム統合・再考—構造化理論 VS. 社会的実在論を中心として—」『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇』19:35-60

ポルノ論争再考 ——虚構的キャラクターを性的対象とする営みに注目して

松浦 優

九州大学大学院人間環境学府 修士課程1年

1. 研究の背景

性の多様性が論じられるなかで「無数の多様性をいかに評価するかという議論」が提起されている。そこではジェンダー・セクシュアリティといった権力による差異が論点となるだけでなく、「有害コミック」論争や「非実在青少年」論争のような「有害」「望ましくない」という議論も生じている。いずれの議論を行うにせよ、多様な性を評価するうえで「私たちの性愛に対する認識の埒外にある倫理的基準を利用せざるをえない」とされる(Weeks 2007=2015: 214)。

本研究では、これまで「私たちの性愛に対する認識の埒外にある倫理的基準を利用」していると思われてきた議論のなかにも、より根本的な「性愛に対する認識」として「強制的性愛(compulsory sexuality)」が持ち込まれているのではないかと、という可能性を考察する。強制的性愛とはアセクシュアル研究から提起されてきた概念であり、「すべての人は性的であるという想定」や「欲望する主体として自身を経験することや、性的アイデンティティを引き受けること、そして性的活動に従事することなどを強制する規範と実践」を指し示す概念である(Gupta 2015: 135)。

強制的性愛とメディアの性的表現との関係は単純なものではない。Gupta(2015)によれば、公共圏に性的表現が増加すること自体が必ずしも強制的性愛となるわけではない。そうではなく、

セックスとセクシュアリティを追求すべき目標として描写する場合や、性的活動やセクシュアリティの欠如を病理化する場合に、性的なメディア表現は強制的性愛に寄与するのである。

このことは、虚構的キャラクターを性的対象とする営みにおいてとりわけ重要な論点となるだろう。オタク論のなかでは、架空の性的空想と現実でのセクシュアリティとが乖離している、という議論が提起されている。この観点からは、虚構的キャラクターを性的対象とすることが必ずしも現実での性愛実践を促すとはかぎらない、という側面があると考えられる。それゆえ本研究では、虚構的キャラクターを性的対象とする営みに焦点を当てながら、強制的性愛と性的表現との複雑な関係性の一側面を分析する。それを通じて、従来のポルノ批判に欠けていた論点を描出する。

2. 方法

本研究では、虚構的キャラクターを性的対象とする営みのなかでもとりわけ「暴力的」とみなされがちな「リョナ」(キャラクターが戦闘や拷問などでダメージを受ける描写への性的嗜好)に注目し、リョナを愛好する人々である「リョナラー」の語りを分析した。リョナはインターネット掲示板に由来する文化であることから、リョナラー向けのインターネット掲示板「リョナ2板」の書き込みを対象とした。まずKH Coderを用いてリョナラーの主要な語りを抽出し、その整理をもとに具体的な語りを解釈した。

3. 結果と考察

多くのリョナラーの語りで、空想と現実の区別が強調されていた。これはSM実践者が合意を強

調していることと類比的に捉えることができる。またリョナラーのなかには、「性嫌悪」や「Aセク」「ノンセク」といった言葉を用いながら、性に対する消極的態度を表明する人々が一定数存在した。このことは、虚構的キャラクターの性的表現が必ずしも強制的性愛を再生産するとはかぎらないということを示していると考えられる。

フェミニストがポルノを批判する主要な理由は、ジェンダー不平等を性的に魅力あるものへと変換することによってジェンダー不平等を強化・再生産する、というものである (Eaton 2007)。しかしポルノを愛好するとしても、その表現内容を「実現されるべき理想」として受容するとはかぎらない。ポルノの表現内容が「実現されるべき理想」とみなされるためには、「セックスは現実の他者と実践するのが当然だ」という認識が不可欠だろう。それゆえ、もしも現実の性関係に適さないような性的空想を非難するとすれば、そのような「倫理的基準」を採用すること自体に、暗黙のうちに「現実の他者との性関係」を望ましいものとするような「性愛に対する認識」が含まれている可能性がある。仮に虚構的キャラクターを用いた性的表現がジェンダー不平等を再生産するとしても、単に性的表現を批判するのではなく、「セックスは現実の他者と実践するのが当然だ」という強制的性愛を批判する必要もあるだろう。

4. 主要文献

- Eaton, A. W. 2007, "A Sensible Antiporn Feminism." *Ethics*, 117 (4), 674-715.
- Gupta, Kristina. 2015. "Compulsory Sexuality: Evaluating an Emerging Concept." *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 41

(1): 131-54.

- 松浦優, 2019, 「「暴力的」な性的空想の倫理に関する予備的考察——インターネット掲示板「リョナ2板」の分析から」『人間科学共生社会学』9 (印刷中)
- Weeks, Jeffrey, 2007, *The World We Have Won: The Remaking of Erotic and Intimate Life*, London: Routledge. (= 2015, 赤川学ほか訳『われら勝ち得し世界——セクシュアリティの歴史と親密性の倫理』弘文堂.)

多様化する性と舞台表現 —ジェンダーから見た日本近代演劇—

江頭 史歩

九州大学大学院芸術工学府 修士課程1年

1. 問題と目的

俳優は生身の身体であると同時に、社会が求めるイメージでもある。そして舞台上で両者がぶつかり合うことによって、各時代のジェンダー構造を浮き彫りにする。つまり、俳優と演劇とそれを取り巻く状況と研究することで、それぞれの時代のジェンダー構造を明らかにできるのだ。

これまでの研究では「女優の存在が社会に大きな影響を与えた」という点については、川村(1968)や中村(1997)などによって明らかにされているが、女優がどのような立場に置かれていたのかという研究や社会とパフォーマンスとセクシュアリティの関係性を示す通史はなく、その内実や変化は明らかにされていない。そこで、本研究では、上演資料や劇評等を参考に、日本近現

代演劇におけるパフォーマンスとジェンダーの関係性とその変遷を明らかにすることを目的とする。

なお、本稿で取り扱うのは、明治時代に興起した新劇とその後当代の様式に対抗する形で台頭したアンガラ・小劇場運動の流れを汲む演劇様式であり、能や歌舞伎などの伝統芸能や、宝塚歌劇やミュージカル等は除外する。

2. 方法

上演記録や劇評などをもとに、近現代演劇史を5つの期間に分け、調査分析を行った。また、アンガラ演劇以降の劇作家3人には、シンポジウム日本劇作家大会2018において、それぞれ1時間程度聞き取り調査を実施した。

3. 結果と考察

明治維新後に女優が台頭してから現在に至るまで、演劇界では「男性の支配・抑圧／女性の従属・被抑圧」構造が存在していた。江戸時代に女役者が禁止されたのち、明治時代に文明国家への一手段として女優が台頭したが、少なくとも第二次世界大戦期まで女優は「個」の存在として認められず、常に国家や男性観客、男性劇作家や演出家によって抑圧されてきた。戦後アンガラ演劇が興起した時代においても、男性演出家や劇作家の表現の手段として活用されたにすぎなかった。そういった中でも、女優は、従来の固定観念を打ち破る作用を持っていた。女性の自我の目覚めや女性の社会的地位の向上、そして社会運動の象徴的存在として、女性だけでなく、男性にとっても影響力の大きな存在となっていった。1980年代以降、演劇界においては女性劇作家の台頭やウーマンリ

ブなどの社会的潮流の影響、女優の社会的な影響力が認められたことなどから「男性の支配・抑圧／女性の従属・被抑圧」という構造が次第に変化していった。

また、女優の条件も変容していることが明らかになった。女優黎明期は、容貌風姿が最重要視されており、容貌の条件を満たしていなければ演劇人から批判されることもあった（坪内、1909）。しかし、新劇が確立された後には、容貌風姿に加え、近代劇作品の特性から、女性らしさや女性らしい心情描写が求められるようになった。そして、戦後アンガラ演劇・小劇場運動時代に突入すると、今度は身体性が第一に求められるようになり、過激なメッセージや大胆な演出を再現できる技術力が重宝され、容姿は二の次となった。1980年代以降の女優には、女らしさや容姿よりも個性が求められており、それが現在の様々な雰囲気を持つ女優の活躍に繋がっている。さらに女性劇作家の台頭や、セクシャルマイノリティが国際的に取り上げられるようになったことを受け、中屋敷法仁の『女体シェイクスピアシリーズ』を代表する女性のみ演劇、蜷川幸雄の演出による男性のみ演劇、野田秀樹の2000年以降の劇作などに見られる異性装で上演する演劇など、性別を超えた人間の一つの表現として、多様な舞台表現が次々に誕生した。

本研究では、変遷の大枠を調査するにとどまっているため、各時代のジェンダーについてはより詳細な資料をもとに再検討する必要がある。また、男性演劇人にも焦点を当て公平な分析を行うことが、今後の研究課題となるだろう。

4. 主要文献・資料

川村花菱、「人形の家」、『芸術座盛衰記 松井須磨子』、(青蛙房、1968年).

中村都史子、『日本のイプセン現象』、(九州大学出版会、1997年).

坪内逍遙、「俳優について」、『作と評論』、(早稲田大学出版部、1909年).

末松謙澄、「演劇改良意見(抄)」、『近代文学評論体系9 演劇論』、(角川書店、1972年).

松井須磨子、『牡丹刷毛』、(新潮社、1914年).

唐十郎、『特権的肉体論』、(白水社、1997年).

宝塚歌劇と越劇における演劇とジェンダー

童 知微

九州大学大学院芸術工学府 修士課程1年

1. 問題と目的

19世紀から20世紀は、ジェンダー研究が急速に発展した百年である。女性解放運動の宣言と見られたイプセンの『人形の家』で提起された女性解放思想は徐々に世界に広まっていた。そして、各国の政治、文化によって異なる形になった。

19世紀初頭、日本と中国において宝塚歌劇と越劇という女性で構成された女性大衆演劇が誕生した。特別な表現(女性が男性のキャラクターを演じることなど)で高い人気(特に女性観客)を得た。

宝塚歌劇の場合、欧米のレビューと海外ミュージカルを輸入して、時代の流れにそくした華やかな大衆演劇になる。越劇の場合、中国の浙江省の地方伝統演劇に基づいて、他の地方演劇の長所を

学び、西洋演劇の監督制度を輸入して、伝統演劇の革新と女優の地位の向上を目指して継続してきた。

演劇、特に大衆演劇は当時では流行であり、歴史的な視点で見れば上演した時代の人間の生活と思想の鏡であるものになる。大衆演劇によって、その時代の一般人のイデオロギーと生活状況が理解できる。本研究では、宝塚歌劇と中国越劇を対象とし、両者の共通点と相違点から日中女性演劇の発展と反映された両国の女性の生活とイデオロギーの移り変わりを分析する。

2. 方法

主に宝塚歌劇と越劇の代表作品を見ることと文献を探し、分析する。

3. 結果と考察(大カテゴリーを【】、中カテゴリーを《》で示す)

本研究で得られた主な結果を、宝塚歌劇と越劇の歴史的背景とその代表作品との比較分析に基づいて示す。異なる国で、近い年代に誕生した女性のみでの演劇としての越劇と宝塚歌劇であるが、前者は苦しい時代で女性、女優のために革新した伝統芸能であり、後者は経済発展に伴って発展した夢を販売している西洋風の新芸能である。

共通点について、宝塚歌劇にも越劇にも「男役」のような役割がある。男役の姿はある中性的な美感を表して、宝塚歌劇にも越劇にも男役に少し女性らしい部分が残された。男性のみの演劇で演じた「女より女らしい」女形に対して、越劇と宝塚歌劇は女性的な審美を認めて、新たな男性像と女性像を創った。

相違点について、越劇は庶民的な大衆演劇で開

始された演劇であり、特別な歴史的な背景において政治と強く繋がった。芸術以外でも様々な女性のための社会的な責任を担って、ある時期には女性解放運動の強い力になった。宝塚歌劇はそれとは異なり、最初から今でも娯楽的な大衆演劇であると思う。女性観客の華やかな夢を満足させ、同じ形式で長い期間に続けている。すなわち、越劇の繁栄は強い時代性を持つ。特定な時代でしか繁栄できないので、時代が変わると越劇も徐々に衰えていく。それと比べると、宝塚歌劇が行っている「レビュー」や「西洋風の印象」、「夢」などあまり時代設定の関係のないものが、宝塚歌劇により長い活力を与えるかもしれないと考える。

4. 主要文献

- 池内靖子.“女優”と日本の近代: 主体・身体・まなざし—松井須磨子を中心に.” 立命館国際研究 12.3 (2000) : 339-360.
- 堀場 清子『青鞥の時代—平塚らいてうと新しい女たち—』岩波新書 1988年
- 川崎賢子『宝塚歌劇というユートピア』岩波新書2005年
- 中国女性史研究会 『史料にみる歩み「中国女性の100年」』 青木書店 2004年
- 細井尚子.“越劇と宝塚歌劇(特集 中国演劇におけるジェンダー).” 中国 21 20 (2004) : 163-190.
- 姜進『詩と政治—二十世紀上海公共文化における女子越劇』社会科学文献出版社 2015年
- 米田佐代子『平塚らいてう—近代日本のデモクラシーとジェンダー—』吉川弘文館 2002年
- 魯迅.“论人言可畏.” 太白 02 (1935) .

- 『中国越劇大典』浙江文芸出版社 2006年
- 兰迪『袁雪芬 此生只為越劇生』上海锦绣文章出版社 2010年

再編される性売買の諸相 —山口県の芸娼妓「解放」に着目して—

川邊 あさひ

九州大学大学院人文科学府 修士課程2年

1. はじめに

性をめぐる問題は、今日でも世界に溢れている。紛争下では、集団レイプ、性奴隷、強制売春など、女性に対する暴力が組織的に行われている。日本でも、性犯罪にあった被害者に対し暴言がはかれることや、「慰安婦」問題に真摯に向き合おうとしない社会の姿がみられる。こうした性差別の構造が今なお立ちはだかる現代にあって、性に関わる問題性がいかにして生まれ、今へと続いているかを歴史的に分析することは、重要なことだと考えている。

本研究は、性の問題の中でも特に日本の性売買に注目し、近世・近代転換期において、近世までの性売買の構造がいかなる連続性・非連続性を持ちながら再編されたのか、具体的様相を明らかにしようとするものである。

2. 方法

着目するのは、明治5年(1872)に明治政府が出した芸娼妓解放令である。これにより、各遊所では動揺が起り、性売買のあり方がこの時期に再編されていくのである。

対象とする地域は山口県とする。山口県文書館には、県が出した布達類が残されているため、「解放」政策の展開を詳細に調査することが可能である。また、豊北歴史民俗資料館所蔵の中川家文書9には、明治10年代までの山口県特牛浦遊所の史料が綴じられている。そのため、県の政策と併せて、政策を受けた遊所における「解放」の実態も検討することができるのである。これらの史料を用いて、山口県の芸娼妓解放令後の動きを分析していく。

3. 結果と考察

明治5（1872）年—明治9年（1876）までの山口県の「解放」政策を、県の布達類を元に調査した結果、短期間の内に政策が転換していったことが判明した。その展開は次のようなものであった。

①【遊女渡世の全面的禁止】→②【遊女渡世の限定的・時限的許可】→③【遊女渡世の許可】

そして、転換していく上で、県は芸娼妓解放令の解釈を変化させたといえる。当初「解放」は〈人身売買による拘束関係の解消、および遊女渡世の廃止〉であると解していたが、③の方針となった段階で〈人身売買による拘束関係の禁止〉のみに解釈を縮小したのであった。そして、人身売買に等しい実態が存続していたのであるが、本人の意志で遊女渡世を願い出ている以上、それは人身売買でないとして、人身売買を禁じた芸娼妓解放令にも反しないとしたのであった。

初め山口県が遊女渡世を廃止する方針を掲げたことは、評価できると思われる。しかし、結果的に人身売買の存続を許し、本人の意志であれば遊女渡世を認めるという制度を、作り上げてしまっ

た問題は深刻である。ただし、注意しなければならないのは、統治者側のみの問題ではないということだ。政策が転換していく背景には、女性からの搾取を続け、性売買を存続させようとする者たちの存在があった。女性を引き取り、養女などの名目に隠して再び売春を行わせる者や、拘束関係は表面上解消されていても、女性に遊女渡世を強いる抱主やそれに連なる者たちの存在は、実体ある「解放」が行われるのを阻むものとなった。

また、需要の問題についても考える必要がある。近世で行われていた海上での売春が、明治5年（1872）に一度禁止されるが、明治9年（1876）には再び認められた。このことは、遊客の側に何ら変化がなかったことを伺わせる。遊女を依然として求める需要の存在は、女性になお売春を続けさせようとする貸座敷などの動きと関わっているであろう。買春男性の問題も含め、芸娼妓解放令を受けた社会全体の反応を、批判的に検証し捉えていくべきであると考えるのである。

4. 主要参考文献

- ・早川紀代『近代天皇制国家とジェンダー』青木書店、1998年
- ・藤目ゆき『性の歴史学 公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版、2015年
- ・人見佐知子『近代公娼制度の社会史的研究』日本経済評論社、2015年

近世武家社会における「奥向の献上」に関する研究

—「大奥の献上」に注目して—

越坂 裕太

九州大学大学院人文科学府 修士課程2年

1. 研究対象と目標

近世日本の武家社会において、将軍・大名間の主従確認行為として機能した献上（大名→将軍）が本研究の対象である。とくに献上の担い手（男性家臣／女性家臣）や空間（表／奥／大奥）の差異に着目することで、献上における男女の協業・役割分担や当時のジェンダー構造を明らかにすることを目標にした。

2. 研究方法

様々な機会に実施された献上について、表向（政治や儀礼）・奥向（日常生活）のいずれの系統に位置づくかという視点から構造分析を行った。その指標として、江戸城の御殿構造に注目し、3つの空間（表／奥／大奥）のどこで献上品の取次や披露が実施されたのかを分析した。

分析史料には、加賀前田家（金沢102万石）の江戸留守居が記した「年中勤方大法書鈔」〈金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫〉を用い、寛政5年（1793）の当主前田治脩（1745～1810）による献上の事例を検討した。本史料では、将軍徳川家斉・御台所近衛菫子への年間の献上における使者・取次担当者について、大名家・将軍家双方の男性・女性家臣の分担が記される。

3. 結果と考察

前田家の献上の分析から、以下のように分類さ

れることが判明した。

- ①表の献上：全大名が一律的基準に基づいて実施した惣献上。表向の体制的な幕府儀礼。
- ②奥の献上：将軍に近侍する側衆（男性家臣）を取次とした領地の特産物などの献上。奥向の機嫌伺い。
- ③大奥の献上：大奥老女（女性家臣）を取次とした将軍や御台所への献上。将軍家と血縁の由緒をもつ一部の大名のみに許された。
ただし、大奥の献上では、大名家側の使者として女性家臣（女使）のほかにも男性家臣が担う場合も確認できたが、この格差の分析は不十分であり、今後の課題となった。

また、こうした構造のもとで、文政13年（1818）に長州毛利家（萩36万9千石）が女使派遣を求めて将軍家と交渉した事例（「公儀事諸控」〈山口県文書館毛利家文庫〉）から、女性家臣を登城させて実施した大奥の献上が、格式の高いものと認識されていたことも明らかになった。女使は将軍・御台所に拝謁を許されるなど、将軍家の奥向空間の内側に入り込んで献上を実施できた点で特異な献上使者であり、将軍と親密な血縁関係を結んだ大名のみに許された献上だった。

4. まとめ

以上のように、男性・女性家臣の協業という視点を取り入れることにより、近世武家社会における献上が担い手・空間の差異を含みながら、複雑な構造をもって営まれたことが明らかになった。

なお、男性家臣による記録の参照にとどまったために、女性家臣らの動向は十分に明らかにできなかった点が課題として残った。今後は、女性家臣による日記や書状も用い、彼女たちの献上行為

への主体的なかかわりについて明らかにするとともに、表向・奥向構造の形成過程を解明することが課題となる。

多様な性的マイノリティの連帯は いかにして可能か

井上 智史

九州大学大学院人間環境学府

博士後期課程2年

1. 問題と目的

近年、日本社会においても性的マイノリティへの関心が高まっており、性的マイノリティを一市民として社会へと包摂しようとする動きが加速している。このことは、「LGBT」という語の流行ともいえる状況からもみてとれるが、「LGBT」の名のもとで展開される今日の社会運動や権利擁護に対しては、レズビアン／ゲイ以外の性的マイノリティの不可視化や資本主義への同調、既存の社会規範や家族規範の再生産などの点において批判が向けられつつある。本研究は福岡での社会運動を事例とし、それらの批判をのりこえる新たな性的マイノリティの連帯の可能性について検討するものである。

2. 方法

福岡における性的マイノリティをめぐる社会運動の担い手へのインタビュー調査を行った。調査はゲイ・バイセクシュアル男性へのHIV予防啓発を行う団体Aの代表X氏（30歳代・ゲイ男性）

と性的マイノリティの情報発信や知識啓発を行う団体Bの代表Y氏（40歳代・レズビアン）を対象に半構造化面接法で行った。

3. 結果と考察

福岡ではA、Bをはじめとして、性的マイノリティの家族会、「性同一性障害者」の当事者団体、プライドパレードの実行委員会などさまざまな団体によって、性的マイノリティをめぐる諸活動が行われており、2013年頃より、複数の団体が共同して講演会、シンポジウム等のイベントを行うなど、一定の連携・協力関係をもって活動を展開してきた。このような連携が強化される契機として、2017年9月の福岡市議会でのパートナーシップ制度導入を検討する旨の市長答弁があった。これを受けて、2017年11月には当事者の声を行政施策に反映させるべく、在福の8団体による連絡協議会名義（代表はY氏）で福岡市長と市議会議長に対して要望書が提出されている。要望書の作成の過程で連絡協議会のミーティングが行われるようになり、提出後も月1回の定例ミーティングが行われている。

福岡市は要望書提出後の2018年3月に「性的マイノリティに関する支援方針」を策定し、それに基づいて4月より支援施策を開始している。施策の項目としては、パートナーシップ宣誓制度、専門電話相談の開設、交流事業、教育・啓発事業が行われている（福岡市2018）。福岡市による性的マイノリティ支援事業は市長の議会答弁に端を発するものであり、市民団体による要望書の提出が実際にどの程度影響を与えたのか定かではない。しかし、X氏へのインタビューでは、福岡市に対してパートナーシップ制度についてトラン

スジェンダーを排除しない制度（パートナー関係にある2者が同性であることを要件としない制度）^{注1}を要求したことが語られた。また、2018年に設置された行政機関の諮問会議にY氏が団体Bの代表としてではなく、多様な性的マイノリティを含む他団体の意見を踏まえた連絡協議会の代表の立場で参加している。

以上の結果から、「LGBT」運動に対しては、レズビアン／ゲイに関する運動が前景化しトランスジェンダーの存在を等閑視しているという批判が向けられるが、活動の実際においてはレズビアン／ゲイの立場性を認識したうえでトランスジェンダーを排除しない連帯の政治が行われている可能性が示唆された。今後は、連絡協議会を構成している他の団体へと調査を拡大し、それらの団体が連携・協力関係に関してどのような意味付けを行っているのかを検討することで、多様な性的マイノリティによる連帯の可能性（あるいは不可能性）を明らかにしていく必要がある。

注1 この点については赤枝（2018: 90）の解説に詳しい。

4. 文献

赤枝香奈子, 2018, 「5章 パートナースhipと生の多様性」風間孝ほか『教養としてのセクシュアリティ・スタディーズ』法律文化社, 87-101.

福岡市, 2018, 「福岡市：性的マイノリティ（LGBT）に関すること」, (2019年2月20日取得, <http://www.city.fukuoka.lg.jp/shimin/jinkenikaku/life/lgbt/lgbt.html>)

近代日本の産業発展と結核 —香川県における出稼ぎ女性労働を中心として—

菊池 美幸

九州大学大学院経済学府

博士後期課程2年

1. 研究目的と課題

本研究の目的は、戦前期の香川県において形成された結核死亡率の特異性について、経済史の視点から考察することである。明治末～昭和初期にかけて、日本全体では若年女子による結核死亡が急増したが、その背景には、繊維産業を中心とした日本の第一次工業化との結びつきが指摘されている（島尾[2008]）。こうした視点から、Hanashima & Tomobe[2012]では、若年女子肺結核死亡率が戦間期日本における経済的發展にともなう負のリスク指標として解釈できると指摘している。これまでの研究は、日本全体の結核死亡率を概観し、それが変動する社会的要因を説明してきたが、労働者を送り出す側であった農村の事例を検証する作業は、今後明らかにされるべき課題として残されたままである。

2. 分析方法

このような問題点・疑問点を解決するために、本稿では、第一に、戦前の香川県において形成された結核死亡の特徴を明らかにするため、1886～2015年までの死亡者数を年齢別にデータベース化し、分析を行う。次に、前述した特徴が生じた要因を考察するため、当該地域の女性労働者に着目し、その実態について高畑[1903]の調査報

告をもとに明らかにする。そして最後に、同県の結核死亡率の特異性を、繊維産業を中心とした近代日本の産業化の過程の中に位置づけていく。なお、本研究が香川県に着目する理由は、当該地域が紡績産業の集積地であった大阪に隣接する農村であった点に加えて、男女ともに多くの出稼ぎ労働者を排出する県であったためである。

3. 結果と考察

本研究では、戦前日本の結核死亡率の変動が、都市化や工業化といった社会的要因によってもたらされたとの視角に基づき、香川県の結核死亡率の推移について分析を行った。その結果、女性による結核死亡が1890年代後半に全国平均を上回り、かつ、1905年という極めて早い段階でピークを迎えた。さらに全国平均と比較しても、当該期における香川県の結核死亡率には極端な性差が看取されることを指摘した。本県においてこのような結核死亡率の特異性が形成された背景には、紡績産業の集積地で、かつ、結核の蔓延地帯であった大阪へ、出稼ぎ女工として県内の若年女子労働力が流出したためであった。従って、Hanashima & Tomobe[2012]が指摘したように、若年女子肺結核死亡率が戦間期日本における経済的發展にともなう負のリスク指標として解釈できるとするならば、近代産業の中心であった紡績業の成長と引き換えに、最もリスクを引き受けたのが香川県の女性労働者であったと結論づけられる。

参考文献

- ・島尾忠男[2008]『結核の今昔—統計と先人の業績から学び、今後の課題を考える』克誠堂出版

- ・高畑運太[1903]「香川県に於ける女工の肺結核患者に就て」『大日本市立衛生会雑誌』238号28-32頁、所収
- ・Makoto Hanashima & Ken'ichi Tomobe, "Urbanization, Industrialization, and Mortality in Modern Japan: A Spatio-temporal Perspective", *Annals of GIS*, Vol.18 (1), 2012, pp.57-70.

中国における若年女性農民工の家族意識に関する研究

曹 家寧

九州大学大学院地球社会統合科学府
博士後期課程3年

1. はじめに

20世紀80年代の改革開放政策が展開されて以降、中国は急速な経済成長を遂げた。その過程でマクロな社会構造とミクロな家族構造の著しい変化が生じた。一方、都市部の経済を発展させるために、農村からの出稼ぎ労働者が都市労働市場に進出し、その数は年とともに増加した。注目すべき点ではその中で、1980年代以後に生まれた若世代農民工は次第に農民工の主体となり、2017年になってはじめて農民工の総数の半分を超え、50.5%を占めた。また、サービス業が進行されるに伴い、女性農民工の数も急速に増加しつつある。

しかし、中国において戸籍制度による「農民」への差別や福祉面において不平等な待遇がそもそ

も存在しており、近年この膨大な若者労働力を支える協和的な社会秩序を追求するために社会及び中国政府は姿勢を大きく変えてきた。また、近年、若年農民工は初代農民工より、高い教育水準を持っている一方、農業経験はほぼないという新たな特性が見られる。特に、義務教育政策により若年女性の教育レベルが高くなってきた。それがゆえに、彼女の生活観念や家族意識も大きく変化しているだろう。

本稿では、社会構造の急速な変化及び政府の公式政策という状況を踏えた上で、ジェンダーの視点から若年女性農民工の家族意識の変容を明らかにしたい。つぎに、その社会構造の変化が具体的に彼女にいかなる影響を及ぼしているかを考察したい。

2. 方法

本研究の調査方法としては、南京市統計局からの統計資料の収集と検討に加え、2018年4月および9月において、2回、南京市に出稼ぎしている若年女性農民工を対象としインタビューを実施した。調査時の5名の調査協力者の年齢は18歳から30歳である。その中で、既婚者は2名であり、子供を持つ者は1名である。比較的方法を通し若年女性たちの家族に関する考え方を考察した。

3. 結果と考察

南京市に出稼ぎしている若年女性農民工の語りをもとに、家族をめぐる考え方を中心に、主に「婚姻について」、「子供について」、「親との関係」の三つ側面から分析した。彼女の事例を通して、社会構造の変化は若者の家族意識を変化させ、彼女の家族関係や意識に影響を与えることが明らかに

なった。

第1に、近年、若い未婚女性が増加してきている。多様化している家族構成により、その生活上の問題も多様である。都市において今後も生活していくことを前提に、将来の生活を送るにあたり、配偶者に必要な要素としては経済力および能力が重視されていると言える。

第2に、女性農民工にとって、子女に対する教育期待も高くなり、都市市民との格差はほとんどないことが看守された。しかし、実際に都市部の学校は学費が高く、戸籍制度の制限のため、農民工の子どもが教育を受けることは厳しい。

第3に、農村部では経済的に発展するにともない、社会保障制度の充実により、若年農民工に関する親子の関係は、従来のような親が子女に経済的に依存することが減少した。逆に、子世代が家事や生活を支援するケースが多くなってきた。

最後に、本稿の限界は、新興都市である調査地の分析を行っていたため、中小規模の都市に出稼ぎしている女性の家族に対しては未だ検討していないところである。また、若年女性農民工の語りに限った考察である。今後は男女の比較の視点から男性農民工の核家族に関する意識についても検討したい。

4. 主要文献

『南京市統計年鑑』各年版 南京市統計局。

木下英司（1996）「中国家族研究の新たな視点のために—山東2農村調査からの提言」『家族研究年報』

谷村光浩（2008）『中国都市への変貌—悠久の歴史から読み解く持続可能な未来』鹿島出版会 pp131-140。

熊谷苑子・榎瀧俊子・松戸庸子・田島淳子（2000）
「沿海地帯農村における女性出稼ぎ労働者」
菱田雅晴編『現代中国の構造変動：社会—国
家との共棲関係』，東京大学出版会。

閻美芳（2010）「中国新農村建設にみる国家と農
民の対話条件——天津市武清区X村における
農村都市化に事例から」『村落社会研究ジャー
ナル』16（2）pp.8-12. 陸学芸主編（2004）
『当代中国社会流动』社会科学文献出版社。

ほめの談話に見られる 日本語と中国語のジェンダー差 —ほめの対象に焦点をあてて—

王 欣

九州大学大学院地球社会統合科学府
博士後期課程3年

1. 研究背景

ほめの談話とジェンダーに関しては、中国語で
は権（2004）、原・曹（2011）、対照研究では梁
（2008）をはじめ、数多くの研究が行われている。
しかしながら、自然会話の分析による日本語と中
国語のほめの談話におけるジェンダー差の実態は
まだ明らかになっていない。本稿では、日本語と
中国語の自然会話を基本データとして、ほめの談
話に見られる中国語におけるジェンダー差を明ら
かにしたい。

2. 研究方法

会話分析理論に基づいて、自然会話のコーパス

を使用し、まず、資料からほめ表現が確認できる
談話をシーンの単位で抽出する。そして、日本語
母語話者と中国語母語話者の男性と女性それぞ
れの用例について、ほめの対象の詳細を分析する。

3. 分析結果

今までの先行研究（権（2004）等）では、そ
の要因のすべてを社会的・文化的な価値観にまと
めているが、本稿では質的分析により、ほめの
対象がその要因の1つであることが明らかになっ
た。ほめの対象、すなわち、何を対象にしてほめ
ているのかが中国語母語話者と日本語母語話者の
男性と女性談話の展開や会話スタイルの違いに影
響を与えていることが明らかになった。

主要参考文献

Holmes, Janet (1988) Compliments and
compliment responses in New Zealand
English, *Anthropological Linguistics* 28:
485-508

——— (1995) *Women, Men and Politeness*,
Longman, London.

Pomerantz, Anita (1978) Compliment responses:
Notes on the cooperation of multiple
constraints, *Studies in the Organization of
Conversational Interaction*, Schenkein, J.
(Ed.) : 79-112, Academic Press New York

权立宏（2004）《汉语中男女在称赞语和称赞语
回应使用上的差异分析》《现代外语（季刊）》
2004年2月 第26卷（1）:62-69

遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子
編（2016）『談話資料 日常生活のことば』
現代日本語研究会

王欣 (2018) 「「ほめ」の談話に見られる中国語のジェンダー差」『日本語文化』5:289-299
松村瑞子 (2018) 『日本語のポライトネス—異文化理解教育の方法開発に向けて—』花書院

Official Discourse on Fatherhood and Family — A Document Analysis of *Women of China Magazine* 1978-1992 —

Tingting TAN

Faculty of Human-Environment Studies The 3rd Year of Ph.D Course, Kyushu University

1. Introduction

To explore gender reconstruction issue, father as the traditional ‘head’ of the family, should not be ignored as the main subject. However, the previous research did not put fatherhood questions at the central of exploring Chinese Communist Party (CCP)’s discourse on gender reconstruction. Namely, there is a gap in research on topics related to official discourse on fatherhood in CCP’s publications. This research therefore aims to answer the following research questions: a) What ‘the ideal father’ and ‘the ideal family’ has the party-state sought to promote from 1978 to 1992? b) How consistent have official messages been? What have been the key shifts in official discourse on family and fatherhood during this period? c) Why have these shifts occurred?

2. Source and Methodology

This research uses the documental analysis methodology and analyses all of the articles published in *Women of China* magazines from 1978 to 1992 (total of 180 issues and 6135 articles).

3. Findings

(1) Frequent Changes in Parental Relationship

In the late 1970s and the early 1980s, “New Modern Women” (*xin nvxing*) make voice of ‘Need Career, also Need Life’ and they also call for ‘Good Husband and Kind Father’ (*xianfu liangfu*). Karl Marx’s close relationship with his three daughters was highly praised as an ideal Good Husband and Kind Father’ in context. There is a significant increase of ‘Iron Women’ (*nv qiangren*) in the mid-1980s. The calling for ‘Super Good Wife and Kind Mother’ (*chao xianqi liangmu*) was also significantly increase. Madame Curie was hailed as a model for the way in which she balanced her career with her role as a wife. Meanwhile, it also made considerable progress in the practice of ‘Good Husband and Kind Father Plus the Enterprising Strong’ (*xianfu liangfu jia shiye qiangzhe*). From the late 1980s, the traditional division of labor “men work outside while women work within the house” is appearing again, and a new class - “the family women’s class” (*jiating funv jiecheng*) has emerged. The “The Better Half” (*xian neizhu*) are more preferred by both young men and women. Furthermore, the practice of ‘Househusband’

was praised, just as the eye-catching article “‘Househusband’ - the progress of men” shows. In the early 1990s, the calling for both ‘Feminine’ (*nvren wei*) and ‘Manliness’ (*nanzi han*) was more emphasized to resist racial change of losing ‘Manliness’.

(2) Smooth Changes in Father-Child Relationship

From the late 1970s to the mid-1980s, father’s main roles are as moral example and teachers. The fathering expectation is to develop children’s independent living ability and cultivate the independent consciousness. In the late 1980s and early 1990s, father’s main roles are as carer and friend. Fathering expectation is to cultivate a happy child with critical thinking. Modern Fathers take on more complex responsibilities. During the period of 1978-1992, the ideal husband and father was expected to be less patriarchal in the new democratic family. However, the egalitarian perception of husbands has not significantly changed much. The intentions of *WoC* are to achieve gender equality and make men more inclined to involved father, but it seems that they are at the same time reinforce gender stereotype in a setting marked by orthodox masculinity, in particular the dichotomy of masculinity and femininity.

Main References

Chu, C. C., & Yu, R. R. (2010). *Understanding Chinese families: A comparative study of*

Taiwan and Southeast China. Oxford: Oxford University Press.

Hu, A.G. (2003). Equity and Efficiency. In Wang, C. (Ed.). (2003). *One China, many paths*. London: Verso. pp: 219-233

Lai, Y.H.N. 2011. *Art and celebrity: a study of the celebritisation of artists in Taiwan 1987-2010*. PhD thesis University of Westminster School of Social Sciences, Humanities and Languages

Lau, S., Lew, W. J., Hau, K. T., Cheung, P. C., & Berndt, T. J. (1990). Relations among perceived parental control, warmth, indulgence, and family harmony of Chinese in mainland China. *Developmental Psychology*, 26 (4), 674.

Wang, A. Y. (2003). Tales of Gender. In Wang, C. (Ed.). (2003). *One China, many paths*. London: Verso. pp: 250-253.

少女マンガが少女に示すジェンダー規範 (雑誌『なかよし』の場合)

坂口 将史

九州大学大学院芸術工学府 博士課程3年

1. はじめに

マンガやアニメ、ゲームなどには、従来少年キャラクターが担ってきたマンガの中での戦闘行為を、主人公である少女キャラクターが行う「戦う少女」を題材とした作品が数多く存在する。これら「戦う少女」作品についてはこれまで、男性

「おたく」や10代前半の少女といった、男性受容者と女性受容者それぞれの視点から研究され、作品で描かれる物語の構造や、受容者が作品から受け取るメッセージについて詳細な分析が行われている。しかし、「戦う少女」という既存のジェンダー規範を揺るがせる題材に対して、発信者がどのような態度を取ったのかについてはほとんど言及されていない。そこで本研究では、「戦う少女」の流れにおいて重要な役割を果たした「リボンの騎士」(1964～1965年)と「美少女戦士セーラームーン」(1992～1997年)を掲載した講談社の少女マンガ雑誌『なかよし』を対象に、「戦う少女」という題材に対するマンガ編集者の振る舞いを明らかにする。

2. 方法

本研究では、編集側が雑誌に掲載する少女マンガをどのような作品として位置づけていたのかを調査する指標として、マンガのキャッチコピーを利用する。なお、ここで言う「キャッチコピー」とは、マンガが雑誌に掲載されるマンガ作品の特徴を読者に紹介するために編集者が付加する文字情報のことである。本研究ではキャッチコピー収集を『なかよし』の創刊号である1955年1月号から1999年12月号まで行い、そのデータを計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を用いて分析した。

3. 結果と考察

1954年から1999年の『なかよし』に用いられたキャッチコピーを分析した結果、「恋」や「学園」、「ロマン」、「ラブ」、「愛」、「青春」といった「学園ラブコメディ」のジャンルを想起させる単語

が多く使用されていることが明らかとなった。「戦う少女」作品を想起させるような戦闘行為に関する単語の中では、最も多く使用されている単語は「アクション」であった。この「アクション」の単語の用法に着目すると、1970年代から1980年代における「アクション」の単語は、ほとんどの場合「アクションコメディ」という複合語として使用されていた。「アクション」の単語が単体で用いられる作品もわずかながら存在するが、それらは主役である少女キャラクターの戦闘行為自体が少ないか、あるいは少年キャラクターが主役であり、戦闘行為もその少年キャラクターが行う作品であった。このように、1970年代から1980年代における『なかよし』では、少女キャラクターを主役とする作品においては「アクション」単体での使用が避けられていた。この用法が「美少女戦士セーラームーン」の連載をきっかけに変化する。「美少女戦士セーラームーン」は連載当初は「アクションコメディ」というキャッチコピーが使用されていたが、連載が進むにつれて「アクションコメディ」の使用は減ってゆき、連載中盤以降から「アクション」単体での使用のみが見られるようになる。すなわち、少女キャラクターが戦闘行為を行う作品であっても、「アクション」のみの使用で作品を表現することが可能となったのである。このように、『なかよし』では少女キャラクターの戦闘行為に対する「笑い」の要素を付加することにより、ジェンダー規範の逸脱を弱めていたが、「美少女戦士セーラームーン」をきっかけに、編集者が「笑い」の要素無く少女キャラクターの戦闘行為を少女読者へ積極的に打ち出すことが可能となったと考えられる。

4. 主要参考文献

米沢嘉博、『戦後少女マンガ史』、筑摩書房、
2007年

斎藤環、『戦闘美少女の精神分析』、ちくま文庫、
2006年

押山美知子『少女マンガ ジェンダー表象論』彩
流社、2007年

須川亜希子『少女と魔法——ガールヒーローはい
かに受容されたのか』NTT出版、2013年

樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』
ナカニシヤ出版、2014年